

---

# ストラッカーズ

壬宇羅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ストラッカード

### 【Nコード】

N9325T

### 【作者名】

壬宇羅

### 【あらすじ】

野球大好きッ娘 えりちゃんのがんばり物語

## 入部1

ズバーンとグラウンドに響く音。  
静まり返った場内に、響く試合終了の音だ。

スコアボードには0対1の文字。

しかし、試合内容は圧倒していた。

初回こそ、四球による進塁を許してしまったが、その後の被安打数は0。

マウンドに佇む少女は、額の汗を優雅にハンカチで拭くと、ニツとはにかみ、ベンチの方へその視線をやった。

視線の先では、監督の満足そうな顔。

さも、当然であるうと言った表情で合図を送るチームメイトの姿がある。

レギュラー陣もマウンドに集まり、彼女を称えた。

彼女の名前は、斉藤えりな。

現役女子中学生の中で、右に並ぶ野球プレイヤーは多分いないだろう。男子であっても、彼女を止める事の出来るものは多分そうはいないハズである。

そう、彼女こそが、天才野球少女えりちゃんなのだ！！

「えり、また野球ばっか見てえい、宿題やったの？」

「今やってるよー、みながらでもいーでしょー？」

テレビには、野球中継が流れ、えりは、それを食い入るように見る宿題である。ワークブックにはまったく手を触れず、握った鉛筆は手汗で濡れている。

「はっはは、いいじゃないか。好きなんだし、ちょっとくらい好きにさせてあげても…」

「もう、お父さんは、そうやって甘やかせ過ぎなんですよ…まったく」

呑気な顔で、笑う父親と、それを呆れる母親。

母親は、それ以上何も言わずに、食器を洗う手を動かす。

「それで、えり、部活の方は決めたのか？」

「え？…うーん」

父親の問いかけに暗い表情で答え、えりはそれ以上は口にせず、再びテレビ画面へと目をやる。

父親は考えている。

確かに、小学校時代は、野球をやらせていたし、それが彼女の為だとも思っていた。

しかし、中学に上がれば、そうもいかない。

男子と女子、男と女というのは、おんなじ成長の仕方をするわけではない。

中学生にもなれば、腕力、持久力、体格、適正体系…様々なものが女子を上回って男子の方が伸びる…。

えりは確かに野球が好きだ、しかし、中学に上がってしまえば、女子に野球をやる環境というものが果たしてあるのか。

答えは簡単だ、NO。

今の、女子中学生の部活動に野球という活動項目はない。

あっても、ソフトボールが限界だ。

しかし、えりはそれでは物足りないのだろう…。

「どうした？ えり？」

「うつん。なんでもない…なんでもないの…」

野球中継を眺めながら、父親はまた、考えに耽った。

「えりー、早く起きないと遅刻するよー」

髪をばりばりと掻きあくびをかきながら姉の、明菜が二階から降りてくる。

「何言ってるの、お姉ちゃん。ボクはも起きてるよ？」

「うわお、早い…なに？どうしたの、いつもよりメツチャ早いじゃん…、なんかあるの？」

「学校」

いつもより早い…そう言うが、姉がこの時間に起きてくる事の方が珍しい。

「そういう、お姉ちゃんこそ」

聞くと、姉は思い出したかのように言う。

「ああ、私、今日学校休みだからねえ」

にやにやとした表情で、そう言うと、台所の母に朝食を要求し、済ました顔でゆつくりと、運んでくる。

「えりは、今日から体験入部なんだって？ なにするか決めたの？」

「とーぜん！！　もち、野球部なんだよ！！」

さも、当然のことを言ったかのように、鼻を鳴らし自慢げに宣言するエリの表情には、なんの曇りも見当たらない。

新聞を読んで、さも、そのことには関心を示さない態度をとっている父親は、その一言で拍子抜けした。つい、一言こぼれてしまう。

「えり…、お前…：野球やるのか？」

その一言に周りも同意のようで、一同えりの回答に耳を傾ける。

「もちろん！！」

それだけ聞くと、明菜はテレビのリモコンをピコピコ変え始め、父親はそうか…とだけ言うつと、再び新聞に目をやる。妹は、よくわかっていないように、ふーんと、納得すると。朝食のトーストをかじる。

「つて、本気！？」

明菜は、たまらずに数テンポ遅れで突っ込みを入れる。

「当然でしょ、だって先生言ってたよ、やりたい部活に入りなさいつて」

「でも、野球部なんて、男子ばつかでしょ！？」

「だって、野球がしたいんだもん！」

父親は、新聞からちらと、視線をずらし、二人の様子を伺う。

えりは、一点張りで、頑なに明菜の言葉を駆逐し、明菜は次第に物言いを諦めた。

「えり、そろそろ、時間だぞ」

そう、父親が呟くと、えりは、慌てた様子もなく。かばんを手に玄関へと向かっていった。

「お父さん！！いいのッ!？」

「いいも悪いもないさ……えりが、やりたいって言ってるんだから止めるまでもないだろ？」

「それはそうだけど……」

そう言うと、明菜はなにかやりきれない表情を浮かべながらも、朝食のトーストをかじった。

「はよー」

「あ、おはよー。今日はなんかはやいねー」

「ん?…そうかな?」

「うんうん、早いよー。だって、まだ八時だよー?」

「でも、部活始めたらこのくらい普通だし、別に早くはないんじゃない?」

「…って、まだ、部活始まってないんだけど……」

時計の針は8時を指し、一年生はまだほとんど登校を済ませていな

い。

部活動をしている、2、3年生が、ちらほらと、教室棟へと向かい始めているところだ。

「うんで。えりちゃんは、どんな部活に入るのかなあ？」

「ん？」

「いやあ。よかったらおんなじ部活に入ろうかなって思ってねえ、へへへ」

「ああ、ボクは、もう決めてるよ。もちろん、野球部ね」

「え…へー」

野球部という単語が入った瞬間に、会話が途切れる。

彼女は、えりが小学時代に野球に没頭していた事は知っている。しかし、それは小学校までの話。

中学になれば、ソフト部。もしくは、それ以外の部活に行くと思っていた。しかし、その予測ははずれ、男子部の野球に入ると言い出したのだ。

「で…でさ…野球部って入れるのかな？」

「ん？…なんで？」

「だって…男子ばっかだよ？…女子が入れるのかなって…」

「大丈夫だよ…だって、先生は、好きな部活に入りなさいって言うてたよ」

「そりゃそーだけど…」

彼女は、そう言うと、その会話を打ち切り、話題をそらす。

「ところでさー、えりは、昨日バッティングセンター行った？」

バッティングセンターというと、去年から建設が開始され、つい昨



日オープンした、色々と新しい機能を取り入れたらしい、バッテリーセンターの事だ。

「ううん…行ってないよ…かなは行ったの？」

「いやいや、行ってないよー。あそこ、いろいろと新しい機能があるみたいじゃん…えりなら行ったかなあと思って」

「うーん、ボクは、どっちかって言う就打つよりも、投げる方が好きだしねえ」

そういうと、球を投げる格好を見せてみせる。

「だよねえ…でもあそこ、なんか、投げる方もあるらしいんだよねえ」

「え？ ホント！？」

「うーん、チラシでちらつと見ただけだからわかんないけど…なんか、投げてる人の写真みたいなのが…あつたから…そうかなあ、と思つて」

その一言に、えりは興味を惹かれる。

バッテリーセンターというのは、普通打つだけのものだと思っていたが、投球があるのなら是非とも行って見たいと思った。

「へー。ちよつと行ってみようかなあ」

そういうのとはほぼ同時に始業前5分前を知らせる鐘が鳴る。

教室には、もうすでにほとんどの生徒が入室を済ませ、思い思いに級友とだべっている。

「じゃさ。今日帰り寄ってこーよ」

かなは、その申し出を待ってましたというかのように、笑顔で頷き、両手を上に突き出してみせる。

「じゃ、放課後ねえ」

「あ、でも、今日から体験入部じゃん…どうしよう…」

「だいじょーぶだって、体験入部は5時まで…それ以上はないから…その後いこ？」

「うんッ!…」

始業の鐘が校内に鳴り響き…それとほぼ同時に担任が、教室へと入ってくる。

「はい、号令」

「きりーつ。礼」

礼が終わると同時に朝礼の時間が始まる。

担任は、持ってきたメモに目を通すと、本題を口にする。それは、今日からの体験入部についての話だ。

「えーと、今日から体験入部が始まります。みんなは、もう部活動の方は決まっていると思うので…そちらの部活動の方へ行ってください…以上。…あち、斉藤はちょっと話があるので、放課後に職員室に来るように」

そう言うと、担任は、適当に切り上げて、1限の授業へと向かっていった。

## 入部

6時間目の終了を告げる鐘が鳴ると、クラスの生徒の大半が、各々の関心のある部活動へと向かっていく。

しかし、えりだけは、今朝担任に呼ばれたため職員室へと向かっていった。

「じゃあ、えり、私部活見てくるから…ゴメン」

「うん…じゃあ、終わったらねー」

はつきりとは見せないが、若干の不安そうな表情を浮かべるえりを心配して、生徒玄関までは付き添ってくれた、かなも、部活へと向かっていく。

友人と別れると、急に心寂しくなる。

どうしようもなく不安になってくる。

担任のあの口調だと、多分、他のみんなのように。女なのに野球とか、他の部活はとか。きつと、野球部に入る事に批判的な意見を言われるのだろう。

「でも、決めたことだから」

そう呟くと、瞳に力を込め、職員室へ力強く向かっていく。

「失礼します」

ガラッと職員室のドアを開くと、目線の先の席には、担任の姿があった。

見ると、担任は帽子をかぶり、野球部のユニフォームに身を包んでいる。

野球部の顧問なんて、すっかり見てなかった…。まさか、担任が、その顧問だったなんて…。

「おい、斉藤？ きこえるかー」

目の前で手を振りながら、呼びかけてくる声にはつと気づく。目の前の担任からの呼びかけだ。

「は…はい！」

慌てて返事を返すと、担任は、さっきまで見せた、呑気な表情を一転させ、真面目な顔つきへと変える。  
えりの予感は的中しそうだ。

「斉藤…お前、野球が好きなのか？」

「…はい」

「どうして？ 女子だったら、他にも色々あるだろ…外なら、ソフトボール…他にもテニスやら、ハンドボール…中でも、バスケットやバレーや色々…なんでまた、野球にしたんだ？」

そこで、えりの言葉が詰まる。

野球が好きだから…。

それは真実だ…しかし、そう伝えたところで、ならソフトボールでいいじゃないかと言う、回答になるのだろう…だったら。自分がどう野球が好きなのかを証明してみせなければならぬ…。

「そう…ですよ…、女子が野球とか、可笑しいですよ…ふざけてるって思っちゃいますよね…」

「いや、そこまでは…」

「言ってます!!」

担任の表情に焦りが見えてくる。

えり、自身がどんどん自分自身を追い詰める発言をする為…回りの視線を意識してしまう。

（おいおい…、まずいだろ…こんなの他の先生に見られたら…どう勘違いされるか…）

目の前の女子生徒は、必死になって何か訴えたいみたいだが…言葉が出てこないようで…今は何も話さない…。

しかし、また一度自分自身を攻めるような事を言われると…それこそ、担任である教師にとっては不利益になる。

「わかった…じゃあこうしよう…、いいか。入部は認める」

その一言に、えりの表情が急激に明るくなる。

「しかし、部員としてでは無くマネージャーとしてだ…いいか？」

マネージャー…その言葉が引つかかる…マネージャでは、グラウンドでプレイが出来ない、野球ができない…。

「マネージャー…ですか？」

「ああ…大体…女子には野球なんて、できないだろう…練習は出来ても試合に出られない…そんなの嫌だろ？」

えりは、その一言に火がつく…これまで、小学校時代にやってきた事すべてを否定された気がした。

小学校時代…それはもう真剣に野球に取り組んだ…当然クラブには男子も多くいて…身長こそ勝るものの体格が負けていたり…完全

に負けていたり…そんな、ハンデの中でも必死に頑張つて来たあの日々を、すべて否定された気がした。

「先生…ひとついいですか？」

「ん？」

マネージャーと言う妥協案を出すことで、今回の話にまとまりがつくとたかをくくった教師は…半分笑み含みで応答する。

「中学野球に女子生徒の出場制限と言うのは無いと思うのですけど…」

「そりゃそうだが…でも…そんな生徒いないだろ？」

「私は、野球がやりたいんです」

それだけ言うと、えりは、職員室から出て行く。

残された教師は、面倒だと言わんばかりの顔をして、その後ろを見送った。

どうやら、えりを入部させるしかないようだ。

えりは、職員室から出ると、半分鼻歌を奏でながら、先ほどまでの陰鬱な気持ちはどこかえ、野球部へと向かっていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9325t/>

---

ストラッカーズ

2011年6月15日01時02分発行